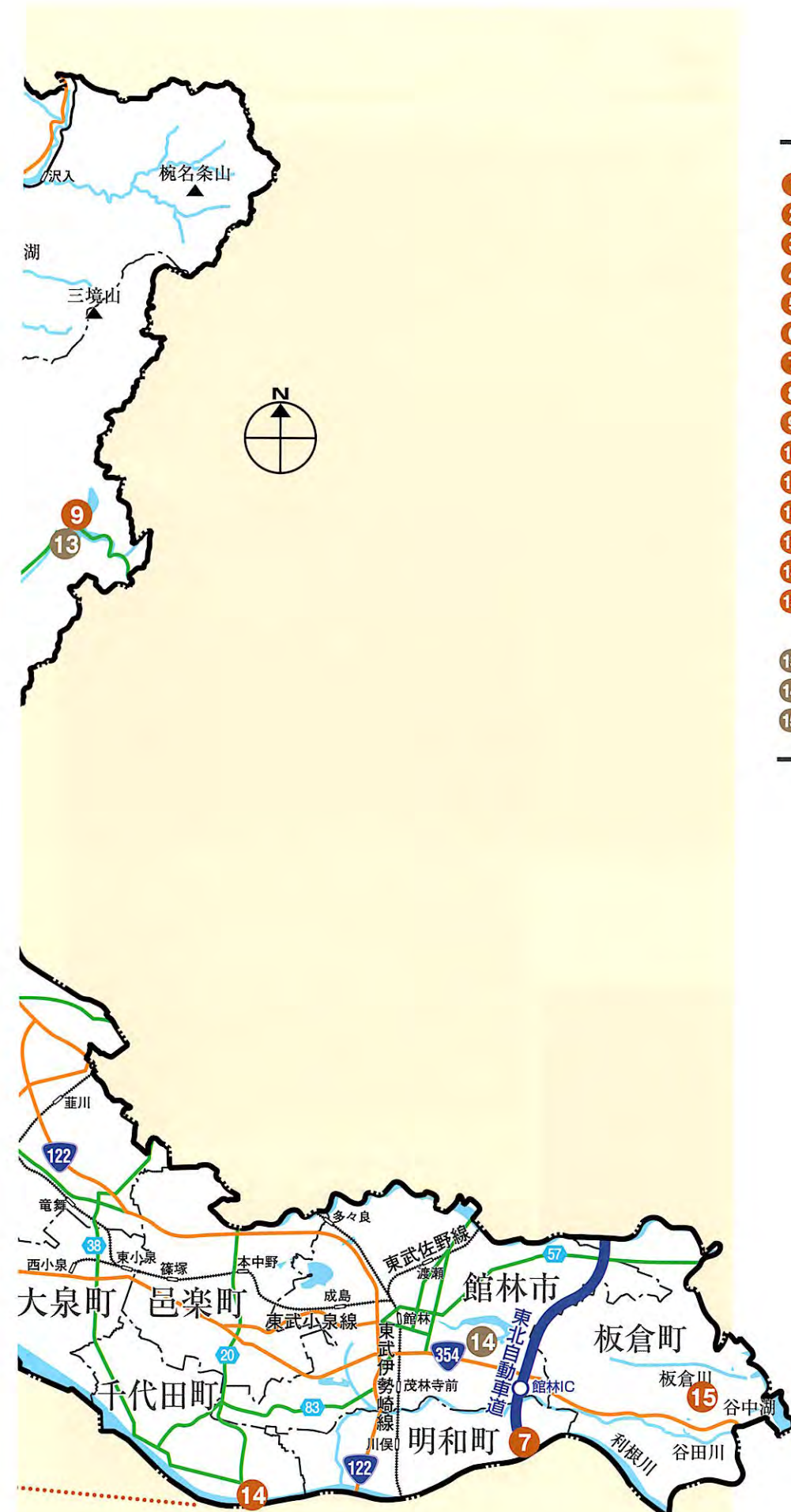
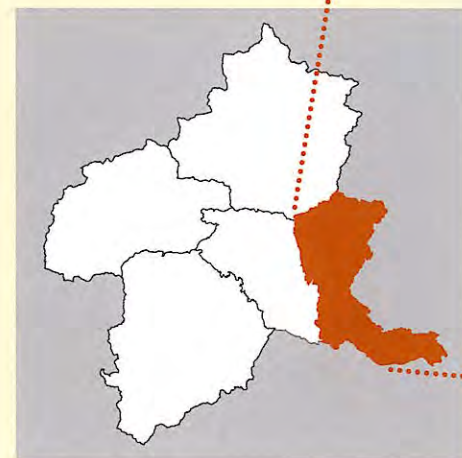


GUNMA AREA



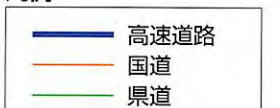
AREA E

土木遺産位置分布図



- | | |
|----------------|-----|
| 1 渡月橋 | 170 |
| 2 袈裟かけ橋 | 172 |
| 3 はねたき橋 | 174 |
| 4 草木橋 | 176 |
| 5 下松島橋 | 177 |
| 6 新上武大橋 | 178 |
| 7 利根川橋 | 179 |
| 8 刀水橋 | 180 |
| 9 梅田大橋 | 182 |
| 10 福岡大橋 | 183 |
| 11 草木ダム (草木湖) | 184 |
| 12 桐生市の水道 | 186 |
| 13 休泊堀 (太田頭首工) | 188 |
| 14 利根大堰 | 189 |
| 15 板倉の水塚 | 190 |
-
- | | |
|---------------|-----|
| 13 桐生ダム (梅田湖) | 199 |
| 14 館林つつじが岡公園 | 200 |
| 15 岡登用水 | 200 |

凡例



この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000 (地形図) を使用したものである。(承認番号 平17給使、第377号)

渡月橋 とげつきょう

関連DATA



歴史の刻みを伝える渡月橋



「あかずの門」とも呼ばれる長楽寺・勅使門（ちよくしもん）



3代将軍家光によって再造された三仏堂



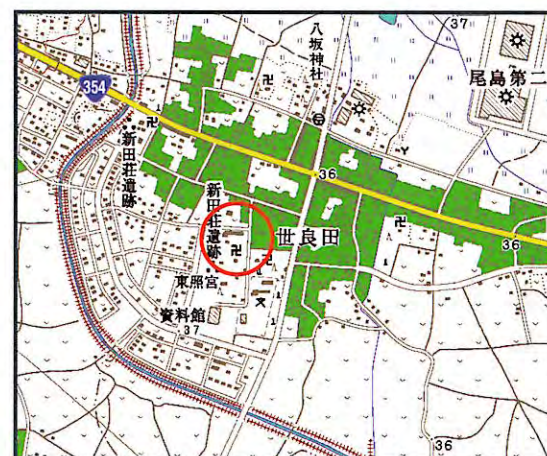
国指定史跡・東照宮



渡月橋の奥に三仏堂が見える

概要

- 所在地 太田市世良田町（長楽寺蓮池）
- 年代 寛政8年（1796）
- 構造形式 石橋（人道橋）
- 主要諸元 橋長6.6m 幅員2.5m
- 管理者 長楽寺



（縮尺 1/25,000）

長楽寺は清和源氏の流れをくむ、新田義重の子、徳川義季により承久3年（1221）に開基され、高僧・栄朝禪師を開山に創建された東国初の禅寺です。鎌倉・室町時代を通じて臨済宗の寺であった長楽寺は、徳川家の先祖ゆかりの地として徳川家康から庇護を受けるようになると、高僧・天海僧正により臨済宗から天台宗に改宗されました。

これにより長楽寺は関東天台の中心的な寺院として大いに栄えることとなり、境内にある東照宮は、寛永3年（1636）徳川三代将軍家光が日光東照宮を改築した際に、それ以前に建てられていた旧東照宮の拝殿の一部をこの地に移築したもので、以後日光東照宮の別当寺として遇されるようになりました。

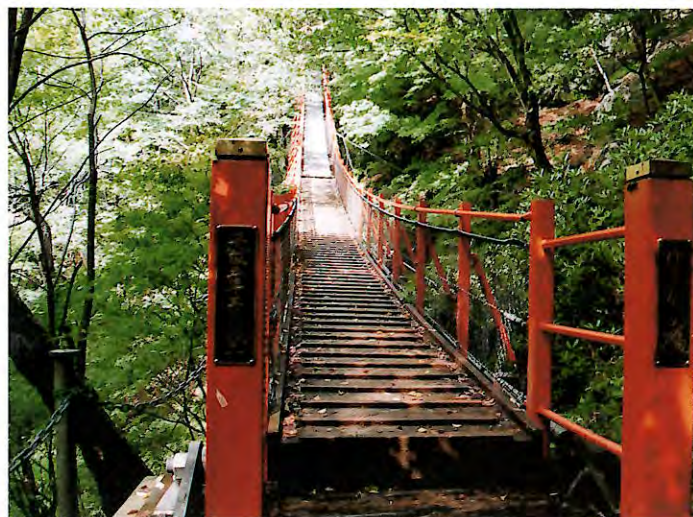
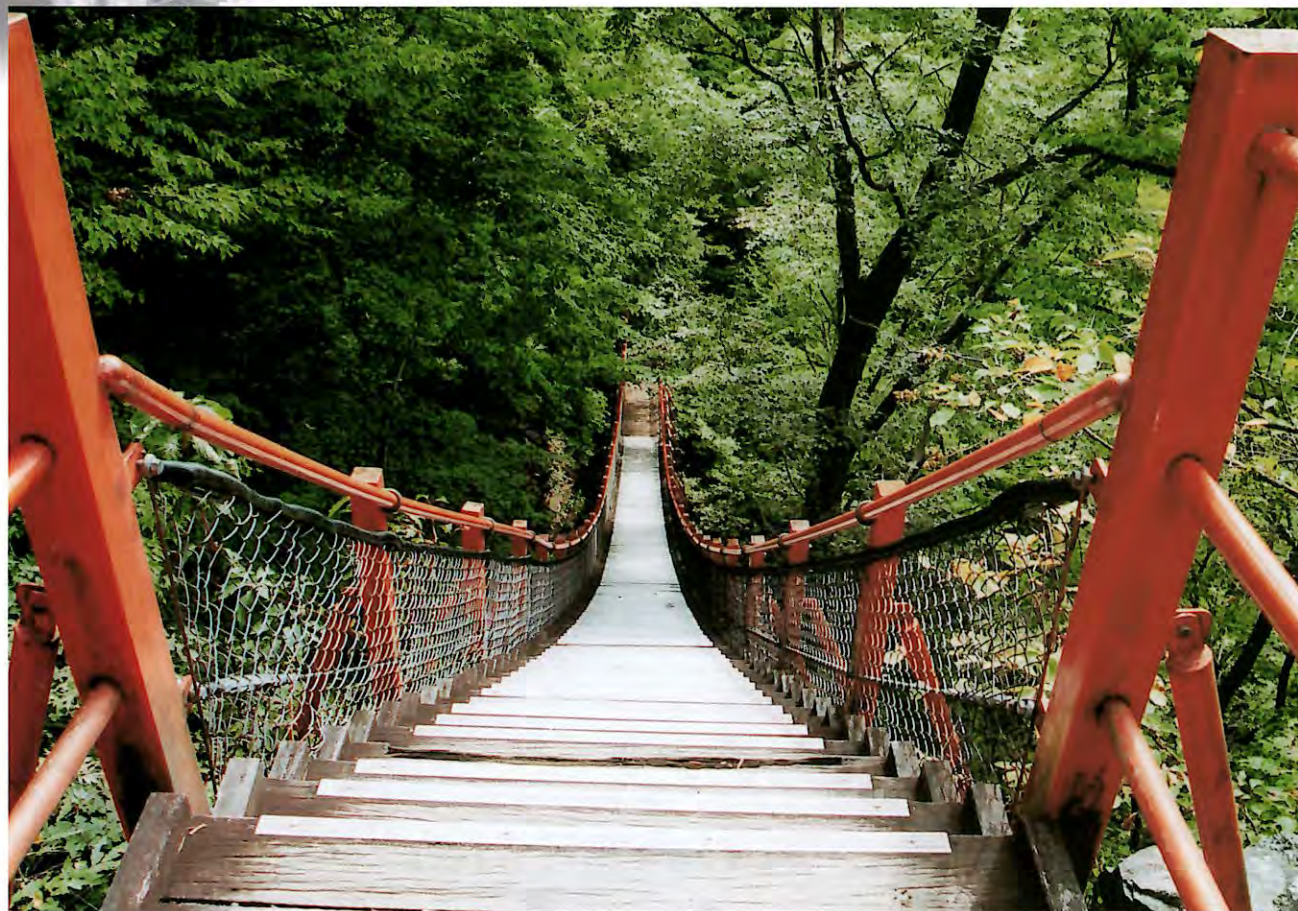
長楽寺と東照宮には、国の重要文化財など貴重な文化財が豊富に所蔵されています。長楽寺には中世の古文書や絵画、彫刻など評価の高い国指定重要文化財が多数あり、一方、東照宮には本殿、唐門、拝殿、鉄燈籠を始め了戒の太刀などが国指定の重要文化財となっています。また、多くの古文書や遺品などは隣接する東毛資料館で目にすることができます。

渡月橋は長楽寺創建当時からの遺構の一つで、後鳥羽上皇によって下賜されたと伝えられる五面の勅額の一面には、この橋に関する記述が残っています。渡月橋は元来木橋でしたが、寛政8年（1796）に御影石を用いた現在の石橋に架替られました。橋桁には修復に携わった人々の名前が彫刻され、木橋当時の欄干の一部は現在でも本堂に保存されています。蓮池は別名「心字池」とも呼ばれ、心の字を象（かたど）って造られたと伝えられ、かつては白い蓮や紅い蓮が群生し、盛夏には水面が紅白の花で埋め尽くされていたと言われています。県道伊勢崎深谷線に面する朱塗りの勅使門から渡月橋を渡り三仏堂に至る風景は、太平記の里、東国禅文化発祥の寺「長楽寺」の歴史を感じさせます。



新田公並一族従臣忠霊供養塔

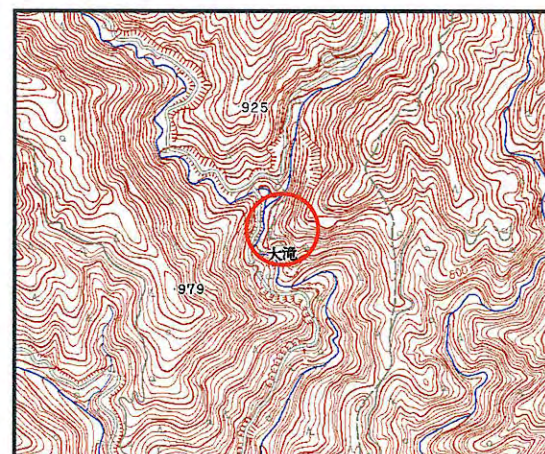
袈裟かけ橋 けさかけばし



下から見上げる袈裟かけ橋

概要

- 所在地 勢多郡東村小中
- 路線名 大滝自然公園
- 年代 平成5年(1993)
- 構造形式 吊床版(木造)橋
- 主要諸元 橋長51.0m 幅員1.2m
- 管理者 勢多郡東村



(縮尺 1/25,000)

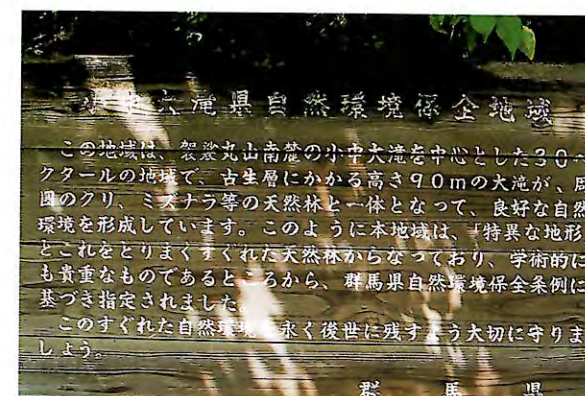
関連DATA



橋から見る小中大滝は迫力満点



公園内のキャンプ場



小中大滝自然環境保全地域の案内板

日光連山の南端、群馬県と栃木県との県境に位置する袈裟丸山(1878m)は、変化に富んだ山歩きコースとして人気が高い山です。この山歩きコースの登山口手前にあるのが、大滝自然公園です。ここには袈裟丸連峰の南西斜面の水を集めて渡良瀬川に注ぐ小中川が流れ、この小中川の水を最大落差96mの滝で落とすのが大滝です。

大滝は群馬県一の落差を誇る滝で、切り立った岩場に水しぶきを上げて流れ落ちる様は、非常にダイナミックで迫力満点の景観を創りだしています。その大滝の目をまたぐように架橋された橋が袈裟かけ橋です。袈裟かけ橋は全長が51m、幅員1.2mの歩行者専用の吊橋で、両岸の高低差の関係から橋面の勾配が最大44度という急勾配の橋梁となっています。このため歩行者の安全に配慮して、橋面は滑り止めが付いた木造の階段構造となっており、117の段数があります。

橋名の「袈裟」は、昔この地を訪れた弘法大師が大滝の流れを見物した時に、付けていた袈裟を岩の上に置いて見物したという伝承に由来すると言われています。深い谷間に架橋された深紅の吊橋は、見事な虹を描きながら落下する大滝とともに雄大な景観を創りだしています。特に、新緑の季節や紅葉の季節には多くの観光客が訪れるほどの鮮やかさです。

この橋を渡った所には展望台が設けられ、大滝の壮大な瀑布を心ゆくまで楽しむことができます。

東村小中追付橋から大滝までの道は、首都圏自然遊歩道「関東ふれあいの道」に指定されています。

この遊歩道は全長約7.4kmで、野鳥の澄んださえずりを聞きながら、静かな山あいの林道を散策することができる手ごろなハイキングコースとなっています。また、公園内には駐車場、バーベキュー場、トイレなどの設備も整備されており、家族で楽しめる人気のスポットです。

はねたき橋

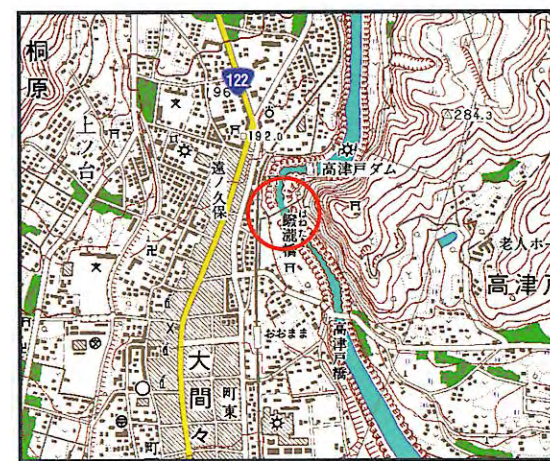
はねたきばし



新緑の頃の高津戸峡とはねたき橋

概要

- 所在地 山田郡大間々町大間々～大間々町高津戸
- 路線名 はねたき橋遊歩道
- 年代 平成6年(1994)
- 構造形式 歩行者専用A型ラーメン橋
- 主要諸元 橋長120.0m 幅員3.5m
- 管理者 大間々町



(縮尺 1/25,000)

関連DATA



はねたき橋は遊歩道の一部でもある



遊歩道から見た「はねたき橋」



高津戸ダム(発電所)とはねたき橋



ながめ公園内の木造劇場・ながめ余興場

高津戸峡は大間々町市街地の東の外れ、渡良瀬川に形成された渓谷です。渓谷は、渡良瀬川の流れが長い年月をかけて河床の粘板岩を浸食してきたものです。高津戸峡と呼ばれる渓谷は、群馬県企業局が運営する高津戸発電所より下流の約800mの区間で、断崖の景勝地を形成しています。この高津戸峡に架橋された橋がはねたき橋で、高さ25mのピラミッド型の主塔の中央から伸びるケーブルでスレンダーな橋桁を支える構造の橋です。橋の高欄には、大間々町の町花であるサクラソウや川面を飛び跳ねる魚を描いたモニュメントが設置され、橋面には地域の小中学生や全国各地から寄せられた花や鳥、魚などの絵画120枚がタイルとなって埋め込まれています。

はねたき橋の旧橋は、渡良瀬川上流の黒保根村に架かっていた木造吊橋(五月橋)を解体・移設したものでしたが、橋の老朽化に伴い平成6年(1994)高津戸峡周辺環境整備の一環として架替られました。

はねたき橋の橋名の由来は、激しく水飛沫をあげる渡良瀬川の流れが、まるで滝のように見えることから「はねたき」と名付けられたとのこと。しかし、この説とは別に渡良瀬川を遡上する鮎の姿が、「滝のほり」をしているように見えたからだという説もあります。峡谷ならではの懸崖をもった景勝地、高津戸峡は、「関東の耶馬溪」「上野の小嵐山」とも言われ、四季折々の風景が美しく、特に渡良瀬川兩岸を紅葉が彩る季節はまさに絶景です。渓谷左岸の高津戸城跡にある要害山、右岸の鎮守神明宮、ながめ公園などは観光の名所で、特にながめ公園内の演芸館・ながめ余興場や毎年10月下旬から開催される菊を歌舞伎絵にした「菊人形」は、「ながめの菊」として有名で、多くの観光客が見物に訪れています。これらの名所を繋ぐ遊歩道も整備されており、峡谷の美とともに人気の高い観光スポットとなっています。



床には、全国各地から寄せられた鳥・魚・花を描いた橋面タイルが埋め込まれている

草木橋 くさきばし



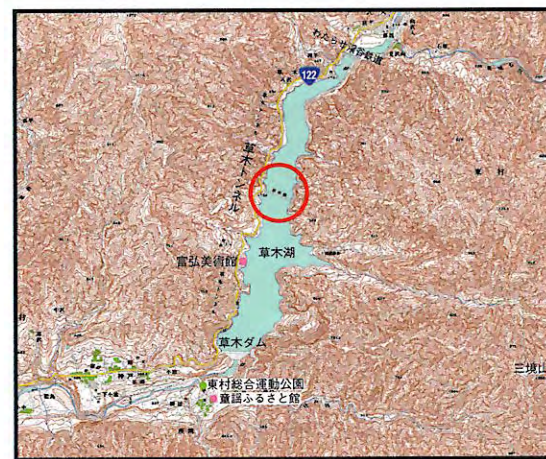
昭和40年(1965)に着工し、昭和51年(1976)に完成した草木橋は、渡良瀬川上流に建設された草木ダムの建設に伴い架橋された橋です。草木ダムは旧水資源開発公団(現(独)水資源機構)により建設された多目的ダムで、洪水調節、灌漑用水、上水道用水、工業用水、水力発電などの機能を有しています。東村に残る文献によると、古くからこの地には吊橋があり、ダム建設に伴う水没に伴う代替橋として本橋が架橋されたとのこと



地元産沢入ミカゲ石で作られたモニュメント

概要

- 所在地 勢多郡東村草木
- 路線名 村道 草木橋線
- 年代 昭和51年(1979)
- 構造形式 3径間連続鋼トラス橋
- 主要諸元 橋長374.0m 幅員5.5m
- 管理者 勢多郡東村



(縮尺 1/100,000)

下松島橋 しもまつしまばし



勢多郡東村は渡良瀬川流域に発展した集落であり、古くは銅山街道(国道122号)の宿場町でもあります。銅山街道は、慶長15年(1610)に発見された足尾銅山に続く街道で、本県内には沢入、花輪、大間々、大原新田(藪塚本町)、平塚河岸の5宿がありました。

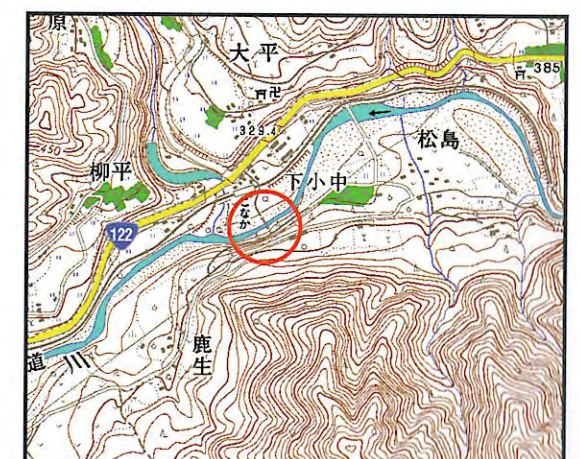
下松島橋は、渡良瀬川左岸側の小夜戸地区と右岸側の国道122号やわたらせ渓谷鉄道(旧国鉄 足尾線)の小中駅とを連絡する歩行者専用の鋼吊橋です。



下松島橋は小中駅に通じる生活橋である

概要

- 所在地 勢多郡東村小中～東村小夜戸
- 路線名 村道 小中小夜戸線
- 年代 昭和55年(1980)
- 構造形式 鋼吊橋
- 主要諸元 橋長58.25m 幅員1.5m
- 管理者 勢多郡東村



(縮尺 1/25,000)

新上武大橋 しんじょうぶおおはし



埼玉県熊谷市内で国道17号（中山道）と分岐し、利根川を渡り前橋市田口町で再び国道17号現道に接続する計画の国道17号上武道路は、本県と首都圏を結ぶ大規模バイパスです。このバイパスが利根川を渡る地点に架橋されているのが新上武大橋です。江戸時代この地には前島河岸（群馬）と高島河岸（埼玉県）があり、昭和51年（1976）まで群馬県と埼玉県とを連絡する二ッ小屋渡船が運航されていました。

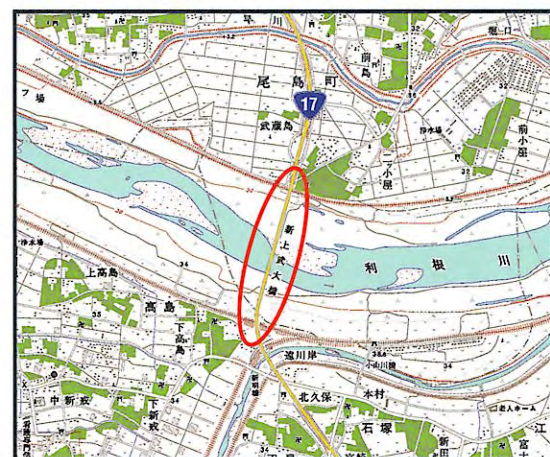
親柱の疾走する馬と飛翔するシラコバトは両県の繁栄を願い立てられました。



未来への思いを込めたブロンズ像、疾走する馬

概要

- 所在地 埼玉県深谷市～群馬県太田市（旧尾島町）
- 路線名 国道17号 上武道路
- 年代 平成4年（1992）
- 構造形式 4径間連続PCラーメン箱桁橋×2連
3径間連続PCラーメン橋、単純PC箱桁橋
- 主要諸元 橋長944.5m 幅員11.5m
- 管理者 国土交通省



（縮尺 1/50,000）

利根川橋 とねがわばし



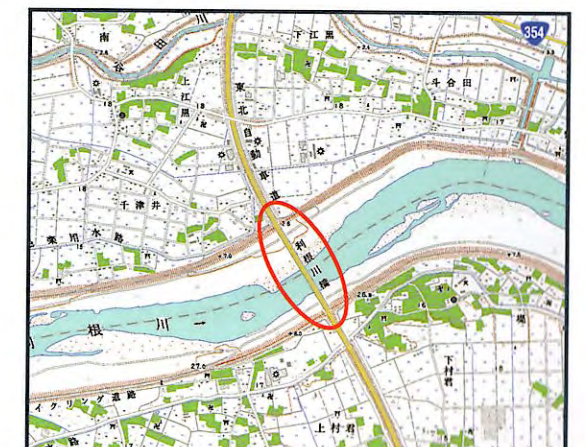
東北縦貫自動車道の利根川橋は、3本の主構を有する下路式の連続平行弦鋼ワーレントラス橋です。主構が3本並列する構造のトラス橋は非常に珍しく、利根川橋が国内最初です。利根川橋付近の河川の水量は上流の利根大堰で取水されることから昔に比べ多くはありませんが、今から20数年前までは、利根川橋の約400m上流で干津井渡船が運行されていました。

概要

- 所在地 埼玉県羽生市～邑楽郡明和町
- 路線名 東北縦貫自動車道
- 年代 昭和47年（1972）
- 構造形式 4径間連続3主構鋼ワーレントラス橋×2連
- 主要諸元 橋長639.0m 幅員14.5m×2
- 管理者 日本道路公団



利根川橋（館林側）



（縮尺 1/50,000）

万葉集に詠われる刀水に架かるアーチの橋

刀 水 橋 とすいきょう

関連DATA



昭和初期の妻沼大橋風景



昭和30年代の刀水橋



昭和40年代。川で遊ぶ人々が見える

太田市古戸と埼玉県妻沼町を結び、利根川に架かる国道407号・刀水橋は、北関東最大の工業都市太田市・大泉町と首都圏とを連絡する幹線道路橋です。江戸時代には、群馬県側には古戸河岸があり、埼玉県側には妻沼河岸がありました。さらに明治時代になると舟橋や板橋などが設置されていました。

その後、大正6年(1917)に中島知久平氏による民間軍需航空機製作会社ができ、軍需産業の発展と共に大正11年(1922)に「妻沼大橋」と呼ばれる橋長684m、橋幅4.2mの木橋が架橋されました。

その後、航空機製作会社は昭和6年(1931)に(株)中島飛行機製作所と社名を変更、国指定の航空機管理工場として太田・大泉地区に大規模な軍需産業工場を建設することとなりました。これらのことから妻沼大橋は、昭和18年(1943)軍需資材の自動車輸送などのため橋長800m、橋幅5.5mの鉄橋に架替られ橋名も「刀水橋」と改名されました。

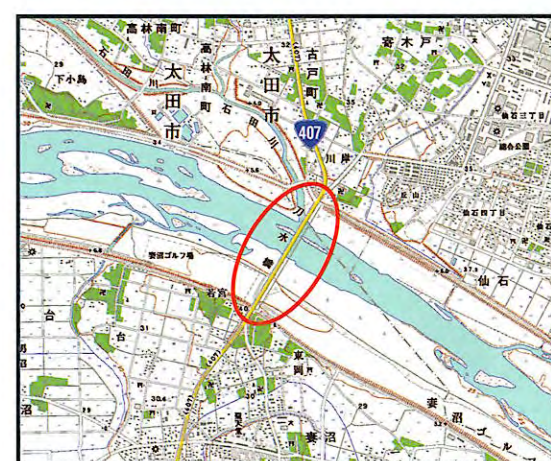
橋名の「刀水」は坂東太郎と同様に利根川の別称で、由来は利根川が「刀禰(根)河泊の川瀬も知らずただ渡り 波に逢ふのす逢へる君かも」と万葉集に詠われたことに始まり、その後江戸時代に入ると漢詩文で「刀水」と著されるようになったと言われています。現在の刀水橋は、昭和46年(1971)に架替られた橋で、利根川の流深部が鋼ランガー橋で、その両端部が鋼箱桁構造の橋となっています。

下流側には歩道橋が併設され工業都市太田市や大泉町に埼玉県から自転車で通勤する人々に利用されています。刀水橋付近の利根川は水量も多く、水上スポーツを楽しむ若者で賑わっています。また、この付近では、空中に飛び上がる1m超級の大きな魚が度々観察できます。

利根川の河道内に残る妻沼大橋の木製の橋脚痕や妻沼町の橋詰にある妻沼大橋竣工記念碑は、刀水橋の長い歴史を今に伝えています。

概要

- 所在地 埼玉県妻沼町～太田市古戸
- 路線名 国道407号
- 年代 昭和46年(1971)
- 構造形式 鋼ランガー橋、鋼箱桁橋
- 主要諸元 橋長809.6m 幅員15.3m
- 管理者 埼玉県



(縮尺 1/50,000)



左が自動車専用橋、右は自転車・歩行者専用橋

梅田大橋 うめだおおはし



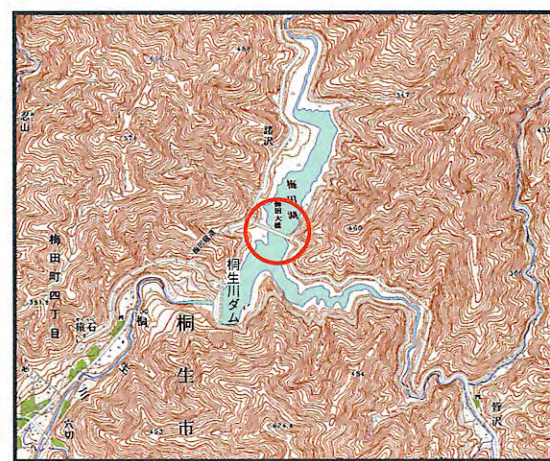
桐生川ダム建設に伴い誕生した梅田湖は、マスやワカサギなどの釣り場として知られています。梅田大橋はダム湖面を横断する橋梁で、U字形の橋脚で橋桁を支えています。橋の構造は3径間連続PC箱桁橋と言われる形式の橋で、橋脚と桁の結合部に特徴がある橋です。山々に囲まれた幽玄の趣を感じさせる梅田湖の湖面に、白い橋の姿はやさしく映し出されています。

概要

- 所在地 桐生市梅田町
- 路線名 県道 桐生田沼線
- 年代 昭和56年(1981)
- 構造形式 3径間連続PC箱桁橋
- 主要諸元 橋長252.3m 幅員7.8m
- 管理者 群馬県



桐生川ダムと梅田大橋、梅田湖全景



(縮尺 1/50,000)

福岡大橋 ふくおかおおはし



渡良瀬川とわたらせ渓谷鉄道を越えて、大間々市街地と渡良瀬川左岸側の貴船神社や鍾乳洞で有名な小平の里などを連絡する橋が福岡大橋です。この橋は昭和55年(1980)に下流の新栄橋の老朽化と幅員狭小に伴い架橋された橋で、渡良瀬川の渓谷をひとまたぎにしています。橋名の「福岡」は旧福岡村から命名されたものです。

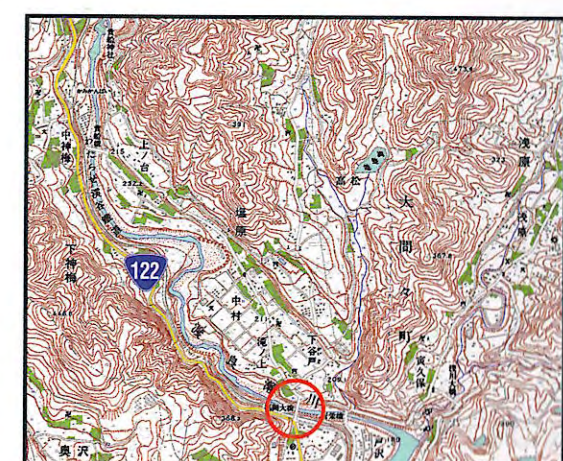
貴船神社は恵方の神、火伏せの神などとして知られています。



貴船神社

概要

- 所在地 山田郡大間々町桐原～大間々町塩原
- 路線名 県道 根利八木原大間々線
- 年代 昭和55年(1980)
- 構造形式 鋼口一せ橋
- 主要諸元 橋長117.0m 幅員8.5m
- 管理者 群馬県



(縮尺 1/50,000)

草木ダム (草木湖) くさきだむ (くさきこ)



ダイナミックな放水が目前に広がる

概要

- 所在地 勢多郡東村座間
- 河川名 利根川水系渡良瀬川
- 年代 昭和52年(1977)
- 構造形式 重力式コンクリートダム
- 主要諸元 堤長405m 堤高140m
総貯水容量60,500千 m^3
- 管理者 (独) 水資源機構(旧水資源開発公団)



(縮尺 1/50,000)

関連DATA



神秘的にライトアップされた草木ダム



春の草木ダムは桜が美しく咲き誇る



富弘美術館



童謡ふるさと館

草木ダムは、勢多郡東村の渡良瀬川に建設された重力式の多目的ダムです。ダムの機能は、洪水調節、^{かんがい}灌漑用水、水道用水・工業用水(東京都、桐生市、栃木県西部)、水力発電(東、小平、高津戸の各発電所(群馬県企業局))などで、渡良瀬川流域最大のダムです。昭和33年(1958)に旧建設省(現国土交通省)が予備調査に着手し、その後、同40年(1965)工事着工、総事業費約505億円を要して昭和51年(1976)に完成しました。以来、26年間に22回の洪水調節による下流の洪水被害を軽減し、東京都等への水道・工業用水を供給するとともに、農業用水の補給など流域住民等の生活の礎として大きな役割を果たしてきました。しかし、ダムの湖底には戦国時代の雄・高草木一族の草木城の遺跡やダム建設に伴い移転を余儀なくされた220世帯の暮らしの跡が人々の想いととも静かに眠っていることも忘れてはならないことです。

平成15年(2003)国の行政改革の一環として草木ダムの管理者も水資源開発公団から独立行政法人水資源機構に移りました。草木ダムの建設に伴い誕生した草木湖周辺には、遊歩道「草木湖をめぐるみち」やキャンプ場、釣り場、スポーツ施設、栗・筍・山菜などの観光農園、宿泊施設などが整備され、家族で楽しめる観光エリアを形成しています。また、隣接する富弘美術館には、多くの美術愛好家や観光客が訪れ、美しい花などの絵画鑑賞を楽しんでいます。草木ダムと湖面が周辺地域の活性化や村おこしにも寄与しています。



ダム下にある東村総合運動公園

桐生市の水道

きりゅうしのすいどう



元宿浄水場の高架水槽上から見た水道山

関連DATA



桐生市水道山記念館（旧配水場事務所）



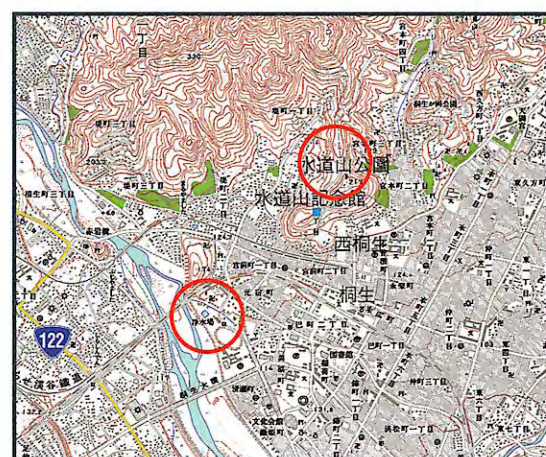
元宿浄水場（水道資料館）



元宿浄水場

概要

- 所在地 桐生市元宿町～桐生市堤町
- 年代 昭和7年（1932）
- 構造形式 沈でん池・浄水池
- 主要諸元 取水能力：72,500t／日
急速ろ過法
水源：渡良瀬川表流水（現在）
- 管理者 桐生市



（縮尺 1/50,000）

桐生市の上水道は、大正11年（1922）に計画されましたが、翌12年（1923）の関東大震災や、水道敷設に関する調査を依頼していた中島鋭治博士が大正14年（1925）に急逝したことなどから計画が大幅に遅れることとなりました。その後、昭和2年（1927）草間偉博士に再調査を委嘱、昭和5年（1930）から工事に着手、同7年（1932）に竣工、給水を開始しました。

この上水道施設は、渡良瀬川左岸で取水した地下水を元宿浄水場に送水し、ろ過・浄水处理した後にポンプを利用して金比羅山後方の水道山配水池に送水、ここから地形の高低差を利用して各家庭に配水する自然流下方式の水道施設でした。高度な浄水能力を擁する元宿浄水場の施設は、当時の地方都市の水道施設としては極めて水準が高く、布設当時の建造物やシステム、急速ろ過器（イギリス・キャンディー社製）は現在でも現役として稼働しています。

また、これらの水道施設と関連する建築物は、若手設計者の清水三五郎氏の手による西洋建築で、建設当時から高い評価を得ていました。特に、昭和7年（1932）に建築された配水場事務所は、赤レンガ造りの塀に白の装飾が美しいライト風のモダンなデザインの建物で、昭和33年（1958）には当時の皇太子殿下（平成天皇）を迎えるなど要人の接待などにも利用されてきました。昭和47年（1972）に水道施設としての役割を終えた配水場事務所は、その後改修が施され、現在では桐生市水道山記念館と名称を改め、会議や研修会等に利用されています。

元宿浄水場のこれらの施設と水道山記念館を始めとする建物の一群は、昭和初期における近代化に関わる遺産として高い評価を得ていましたが、平成9年（1997）に施設や建造物が国登録の有形文化財に指定されることとなりました。



登録有形文化財のプレート

休泊堀 (太田頭首工) きゅうはくぼり (おおたとうしゅこう)



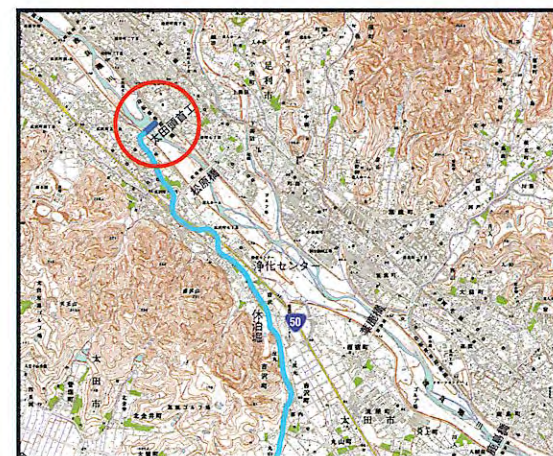
休泊堀は、大谷休泊（大永元年（1521）～天正6年（1578））、上杉憲政の家臣、のち館林城主・長尾頭長の家臣が館林市成島に居宅を移した時に開削した灌漑用水路です。用水路は上・下の二つに分けられ、上休泊堀（休泊川）は渡良瀬川の水を太田市内ヶ島の太田頭首工で取水し用水路を経て、約600haの田畑を潤し明和町の大輪へと通じています。下休泊堀（新堀川）は多々良沼の水を引くし約500haの田畑を灌漑し、明和町江黒に通じています。このほかに大谷休泊は土地の開墾、大谷原山林と呼ばれる美林を整備しました。このため大正4年（1915）に生前の功により叙勲されました。



現在の休泊堀

概要

- 所在地 太田市～邑楽郡明和町
- 取水河川 上休泊堀 渡良瀬川
下休泊堀 多々良沼
- 年代 元亀元年（1570）
- 灌漑面積 約1,100ha
- 管理者 待矢場両堰土地改良区



(縮尺 1/100,000)

利根大堰 とねおおせき



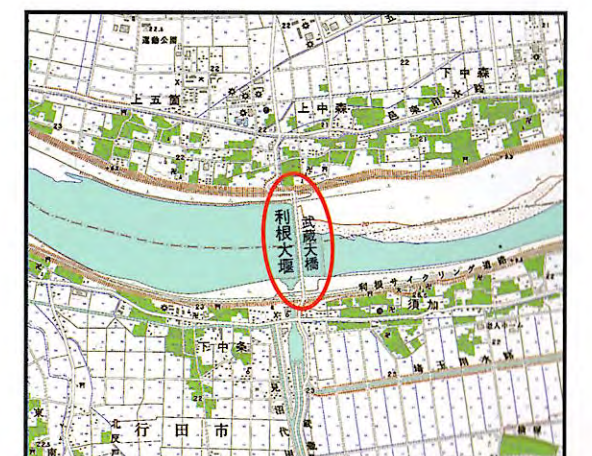
利根大堰は、首都圏の急激な水需要の増大に対処するために建設された取水堰です。堰は昭和40年（1965）に着工、昭和43年（1968）に完成しました。取水した水の約37%は武蔵水路を通じて東京都の都市用水と荒川の浄化用水として利用されています。残りの約63%、86.96m³/秒の水は群馬・埼玉両県の農業用水として邑楽用水、見沼代用水、埼玉用水を通じて田畑を潤しています。また、利根大堰は堰の管理橋に、群馬県と埼玉県とが県道（足利邑楽行田線）を認定し、武蔵大橋として利用しています。



利根大堰は県境を結ぶ橋でもある

概要

- 所在地 邑楽郡千代田町～埼玉県行田市
- 河川名 利根川
- 年代 昭和43年（1968）
- 構造形式 鉄筋コンクリート造
- 主要諸元 堰長691.7m、可動堰幅495.4m
門扉12門、取水口126.8m
- 管理者 (独) 水資源機構 (旧水資源開発公団)



(縮尺 1/50,000)

板倉の水塚 いたくらのみづつか

納屋の梁に吊り下げた揚舟

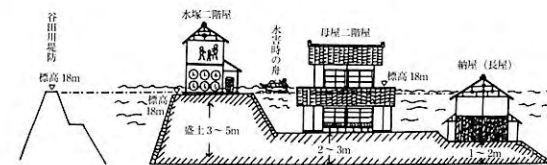
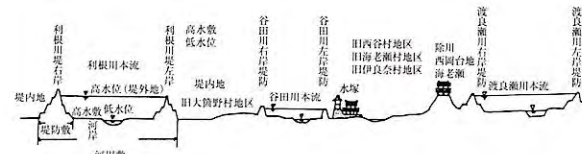
概要

- 所在地 邑楽郡板倉町他
- 年代 近世初期
- 構造形式 水塚
- 主要諸元 家屋・揚舟等
- 管理者 個人

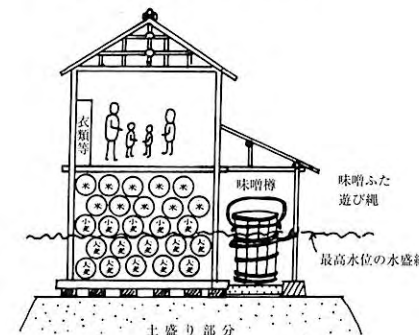


(縮尺 1/25,000)

関連DATA



板倉町の水塚と母屋、堤防の相関図



水塚への穀物の積み方



工夫された食糧の貯蔵



右上に見える赤い線まで増水した

利根川と渡良瀬川に挟まれた板倉町は低湿地の穀倉地帯です。このため昔から台風等による洪水被害が度々発生しました。そこで、家屋の建築に際しては建物を建てる地盤を高盛土にしたり、建物を二階建てにして生命や財産を守る工夫をしてきました。

また、建物の裏手に同様の構造の倉庫兼用納屋を建てて緊急時に備えるなどの対策をしました。

板倉町、明和町、館林市など利根川中流域の人家にみられるこのような構造の家屋を「水塚」「みづつか」「みづつか」とも言うと呼び、現在でも数多く残っています。建物の1階には米や味噌などの食糧を貯蓄し、2階は洪水時に家族が避難できるように最小限の生活必需品を収蔵し、出水時に家財道具を運び込み、水が引くまで生活できるように工夫されています。また、1階の米や味噌の貯蔵についても、水に浸かっても強い順に大麦、小麦、米、大豆などから順に積み、味噌樽については濁流に樽が流されないように柱に縛れるように考えられています。さらに米などの貴重品は、それまでの水害の記録をもとに最高水位より上位に多く積むなどの配慮がなされていました。

これも多くの水害を経験した人々の生活の知恵でした。また、家屋が浸水した場合の緊急の備えとして、家の軒下に「揚舟」と呼ばれる船を吊り下げ、洪水発生時の避難、移動、物資輸送などに利用しました。揚舟は2.5間(約4.5m)から3間(約5.4m)程度の船で、万一のために備えられたものです。

最近では中小河川に排水機場が整備され、利根川や渡良瀬川からの逆流がなくなり、さらに内水を排除することが可能となったため、水害の危険性は著しく減少しました。それでも板倉町周辺地域の家には、今でも多くの水塚と揚船が残されています。